

「新潮45」2013年3月号より

人間関係愚痴話

曾野綾子 作家

第二十二回

マラリアに罹らない方法

子供同士の苛めや喧嘩と、主に教師などによる体罰とは違うという世間の判断は、それが常識というものである。私の周囲にも、子供の時、教師や上級生に叩かれたりしても、それは温い関係で少しも傷つかなかったという思い出を語る人も多いし、「男の子に殴られたら殴り返してやりましたよ」というファッション・デザイナーの美女もいた。それが健全な「苛めの周辺」というものだろう。

しかし苛めというものは、その質と量の絶対を測る基準の数値がない。ほんのちょっと背中を押しただけ、と思っている、やられた本人は、そこは危険な崖っぷちだったのだから、押しやられて命の危険を感じたと言うかもしれないし、こちらを見た、という視線だけに怯え傷つき、それ以来、人間関係がうまく行かなくなったと言った人に昔会ったこともある。

これは現実にある或る出版社の話だが、昔「鬼編集長」と呼ばれるこわもての編集長がいて、よく部下を叱った。そして相手がしょげていると、「飛び下りるか？ ここは五階だよ」と言うのだそうである。

同じ社の、鬼編集長より少し若い世代が笑って言う。

「今どき、そんなこと、絶対口にできませんよ。ほんとうに飛び下りる懦弱な世代ができてますからね」

同じ言葉、同じ目つきや仕草に対しても、相手の受け取り方は、千差万別だから、外側から決めることはほとんど不可能である。

その苛めという恐ろしく人間的な部分に関して、行政がどう関与できるか、ということになると、私は非常に懐疑的だが、しかしなすべきことがない立場の人間というのもないわけで、すべきこと、できることは簡単に決められるだろうと思う。それは、もうこういう状態になった以上、教育を目的にしたものでも、叩いたり、殴ったりすることは、一切ご法度ということにする規則を作ることだ。

私は現世で、いろいろと卑小なことで悪いことをして来たという自覚はあるが、人を殴ったり叩いたり、腹を立てて器物を壊したりすることだけはしたことがない。昔そういう光景を見たことがあって、それがどうも賢い人のすることとは思われなかったからだ。しかし叩いた人は、それが有効だと思ったからしたのだろう、と思っている。

或る公立小学校の先生によれば、今でもすでに、児童が学校で顔のみならず、頭部に少しでも傷を負った場合は、それがけんかではなくて単なる過失であっても、教師は父兄に報告しなければならないのだという。つまり子供たちは腫れ物に触るようにして育てられ

るわけだ。昔はおでこを擦りむいたって、医務室の係の先生が、消毒液をつけてバンソウコウを貼るくらいのことをするだけだった。

子供に対してていねいにするのが現代の父兄の大方が望むことなら、その通りにするのがいい、と私は思う。それが民主主義というものなのだろう。しかしそれでは、生命力の強い子は育たないような気もするのだが、それは私の趣味で、他人の望むことには確信を持ったことがない性格なので、この際、暴力厳禁制度をとるのもいいことかもしれない。ぶん殴ったって、最初からその気のない人間やもともと才能のない人間たちは、それ以上にはあまりよくなることが多いのだし、殴らなくなったって、最初からものごとのわかっている人間も、別にそれによって変わらない。

私は幼い頃、母から肉体的にはめっちゃくちゃに過保護な環境で育てられた。この世でついに会わなかった姉が三歳で死んだ後、六年目に生まれた一人っ子だったから、母は私を死なせたら、二度と子供を授かる機会はないだろう、と思っただらしく、周囲が呆れるほどの防備的な姿勢で育てたらしい。戦前の日本には、抗生物質がなかったから、子供は、疫痢、赤痢、大腸カタル、肺炎、などで、よく死んだ。たいていの家庭が死んだ子の思い出を持っている。現代でも、一時期アフリカの一部の国では、幼児は四人に一人くらいの割合で死ぬ運命にあったから、その覚悟で家族の労働力を確保するために、子供を余計に生んでおくのだ、という人もいるくらいである。

私の置かれた環境は、むしろ病的な衛生観念の中にあった。生ものはだめ。ピクニックに行くと、母はリンゴの外側と手を、アルコール綿で拭いてから皮を剥いた。皆が食べている駄菓子もバナナもかき氷も、私は食べさせてもらったことがなかった。バナナがどうして疫痢の原因と思われたのか、今となっては理解に苦しむが、あれはお腹を壊す元だという常識が世間にあったのだ。

小学校四年生の時、大東亜戦争が始まった。次第にものがなくなり、生活環境は日々悪くなって行った。それをいいことに、私はどうも自分の育てられている日常は異常だと感じるようになった。人間は猿ではないのだが、大地の上で、少くく土に汚れた手でものを食べても生きるようになってはいるはずだ、という感じがしたのである。免疫などという言葉は知らなかったが、私は戦争中、女工として工場の生活も体験し、むしろ生き生きと自由な暮らしを覚え、次第に丈夫にもなって行った。

十代後半からの私の健康は、ほんとうに恵まれたものだった。視力障害と、足の骨折以外は、入院というものをしていない。内臓の病気もなかった。私は途上国に度々行ったが、そうした土地に対応する体力だか知恵だかも、次第に身につけた。私は徐々に自分を不潔に馴らすようにさえした。食事の前に手を洗うなどということは、かなり頻繁にやめにしたのである。ただ、普段はかなり大食だと思うのだが、途上国では食事の量を減らし加減にした。経口的に体に入る菌の量が減れば、病気を発症しない、という原理に従ったのである。しかし過労はすべての病気の元だと思っているから、途上国では早寝早起きの、修道院のような禁欲的な暮らしをした。お酒を飲んで、夜遅くまで起きている同行者

と比べたら、多分私は免疫が落ちないように自己管理をしていたのである。そのおかげか、何十度アフリカの奥地に入っても、私は肝臓を守るために予防薬を飲まずにいたにもかかわらず、一度もマラリアに罹らなかつた。私は免疫を保つ暮らし方がうまくいったのか、それともまだほんとうにはアフリカと対決していないか、どちらかであった。

マラリアについては、忘れられない名場面が、レドモンド・オハンロンの『コンゴ・ジャーニー』に出て来る。オハンロンは一九四七年生まれの、イギリスの有名な旅行作家だが、アメリカ人で動物行動学の専門家ラリー・シャファーと、一九八九年頃、コンゴ共和国の奥地を旅した。もう一人、マルセランといういささかうさん臭いところのある、コンゴの動植物保護省の役人が、彼らの案内人でもあった。

まだ川船が出港する前から、オハンロンは、自分の体に異変を感じる。

「体中の力が抜け、目まいがした。『マルセラン』と私は打ち明けた。『実は昨日マラリアになった』

マルセランはなんの関心も示さなかつた。ガスストーブをコメ袋の奥深くに隠す作業に熱中しながら、『それがどうした』と言った。『ここはアフリカだ。上流に行けば、またなる。二人ともなる。みんなマラリアになる』

私はまだマラリアに罹っていない。それだけアフリカと対決していない、とここでも私は感じるのである。むしろ私の生半可な知識が、私の言動に出ることもあった。私はアフリカで長年仕事をし続けている友達が、日本でマラリアに罹ったと聞いて、同情をこめたつもりで見舞いの言葉の代わりに言ったのだ。

「よかったですね。これで、今まで持っていた悪い病原菌が死んだわ。できかけのガンだって治ったかもしれない」

今マラリアの話をするつもりはなかつた。私は苛めについて書き始めていたのである。しかしなぜか、苛めに遭うことと、マラリアに罹ることとの間には、どこかに相通じる要素があると感じ始めていたのだ。

大局的に見て、マラリアに罹らないためには、マラリア蚊を駆除することが大切だ。地球上の歴大な面積の汚染地区から、マラリア蚊を一掃することは、昔からあらゆる人道的医師や団体の夢見たことであつた。しかしマラリア蚊が主人公の土地に行けば、そんなことは夢のまた夢ということがわかる。そうした地帯には、電気がない。道がない。下水も上水も区別がないような泥だらけの土地が多い。

昔アマゾンの入り口で、マラリアとの闘いの方法を語ってくれた人がいた。アマゾン河を上流から川船で下って来ると、執拗な熱帯雨林の中に突如として夢のような人工的な一種の町が見えて来る。それが「ベトレヘムスチール」というアメリカ系の会社であつた。

そこで働く職員たちは、マラリアを初めとする病気から身を守るために、まず熱帯雨林を駆逐する。森林を広範囲に亘って伐採し、湿地でない居住地を人工的に造成し、自家発電を装備し、初めてそこに自然を排除した文化に守られた町を作る。うろ覚えなのだが、マラリア蚊は、風の中を百メートル以上は飛べないのだそうで、差し当たり百メートル四

方以上の風がよく通る空間を作らねばならない。

アフリカでは、マラリア蚊との闘いは今もまだ現実の問題として続いている。ことし六月、私が訪ねようとしている南スーダンで働いているカトリックのシスターたちは、私たちのスーダン訪問の時期は雨季に入る頃と思われ、マラリアが猖獗を極める季節の到来だと警告してくれた。仕方がない。マラリアがあるからと言って、少なくとも私は仕事の計画を延ばしたことはない。抗マラリア薬は私にとっては吐くほど体に合わない薬だが、今回だけは、短期間の訪問なのだからそれを飲むか、と考えている。それとマラリア蚊は日中は出ない。夕方から夜だけ、外へ出ないようにすれば、かなり防げるのである。しかし何よりマラリアに罹らなくて済むのは、栄養をも含めた個人の免疫力だと思うのである。だから無理や過労はいけない。深酒も寝不足もいけない。かくして再び人は、修道院風の生活をするより他はない、という結論に達する。

マラリア蚊の撲滅のために、理論としては行政が地球的規模で動くべきなのである。WHO（世界保健機関）とかUNICEF（国連児童基金）とか、それを可能にするだけの名目上の規模を持った組織がある。そしてまた民間の団体や善意の企業の中には、蚊が湧かないような下水の整備とか、殺虫剤を染み込ませた蚊帳の発明並びに普及とか、さまざまな工夫を凝らした企画と方法で、感染を防ごうとしている人々がいる。それらの組織のどれもが大切なものだ。

しかしそれでもなお、地球上から蚊という虫を消滅させることのできる日が来るのかどうか私にはわからない。

私にマラリアに対する警告をしてくれた日本人のシスターはもう足かけ二年南スーダンで暮らしているが、まだマラリアに罹らない、と言う。「それは日本にいたことについての体力と免疫の蓄積があるからではないかと思えます」と彼女は書いて来ている。

苛めというものは、マラリア蚊と同じように、人間の手の及ばない貧しさから発生している。つまり心の貧しさである。

東南アジアでもアフリカでも、十九世紀、二十世紀に白人がやって来て、都市を発展させた時、経済的・知的エリートが住んだのは、まず高地であった。と言っても、高原というほどはつきりした高地ではない場合もある。ほんの十メートルほどの丘でもあれば、そこには水溜まりができにくく、土地が乾いているから、つまり蚊が湧く可能性が低いのである。

まず高台に高級住宅地ができたのは、景観や趣味の問題ではないのだ、ということを私は東南アジアで知った。生き延びるためには、彼らは高台で蚊の湧きにくい乾いた丘に住む必要があったし、密生した原生林の中では、風速何メートル以上かはつきりしないが、とにかく蚊が飛べない程度の風通しのいい空間を人為的に作るために熱帯の森を切り開く必要があった。趣味のためではなく、端的に、そうしなければ生き延びられなかったのである。森を切るのは、地球温暖化によくない、などという思想もなかった時代だが、人間はまず自分が生きなければ、温暖化防止も考えられないだろう。

苛めは政治的制度で止められるものではない。苛めはいつの時代のどんな状況でも発生する。それが私の前提だ。学校を出て会社に入っても、外国に住んでも、町に家を作っても、田舎の農家に嫁に行っても、引退して旅行会に入っても、必ず苛めと思われる事情は発生する。その人が強い立場にいても、弱い立場の人からさえ苛められることはあるのである。それにどう対処していくかが、ほんとうの苛め対策だ。

キリスト教の思想の中には「原罪」という観念がある。すべての人は、人祖から負った罪があり、自分で犯した罪がなくても、生まれながらにして罪の要素を背負っているという考え方である。

私は子供の時から屁理屈をこねるのが好きだったから、自分で犯したのでもない罪などというものを、引き受けることはまっぴらだと考えていた。しかし中年になって、或る時、一人の婦人が言うことを聞いて、ふと原罪の姿が見えたように思ったのである。

その女性は、極く普通の結婚をした。夫になった人は、女手一つで育てられた。つまり姑にとって彼女の夫は、たった一人の「かわいい、かわいい息子」だったのである。だが、それくらいの事情は世間にいくらでもあるだろう。しかしその姑は、嫁を激しく憎んだ。何もしなくても、ことあるごとに辛く当たった。

「私は一体、お姑さまに、どんな悪いことをいたしましたか？」

とその嫁は或る日、開き直って姑に聞いた。すると姑は答えた。

「何もしなくたって、ただあんたがいるというだけで、私は不愉快なんだよ」

その答えほど、原罪というものを説明しているものはなかった。

苛めも、同じようなものだ。原罪のようについて廻り、マラリア蚊のように決してなくならない。だから政府や、教育委員会や、学校が守ってくれる運動と同時に、今差し当たりの身の安全を保つために、自らそれを防ぐ方法、つまり心身の強さを身につけなければならぬ。

金持ちは貧乏人を押し退けて高台に住む手もある。しかしそうした土地でさえ、一匹の蚊にも出会わないで済むということは考えられない。NGOは殺虫効果つきの蚊帳を配る運動もしてくれるだろう。しかし蚊帳というものは、寝床の下の土間が平で、そこに雑物がない時にだけ初めてその効果を発揮する。貧しい人の家は壊れた家具や器具が床に散らかり、剥いた果物の皮や脱ぎ捨てた衣服までごみのように溢れているのが普通だから、恐らくそのでこぼこの裾から蚊は入り込むだろう。皮肉なことに、そうした土地には、「鎌状赤血球」という遺伝性のヘモグロビン異常を持つ人たちがいて、そういう人たちは感染しても原虫が育たないので発症しないのだ、と聞いた時、私はそれこそ救いだと思いかけたものだった。しかしそういう人たちは、結局は貧血で健康を害して、また長生きしないのである。

マラリアと同じように、現世にはほぼ解決できないと思われる負の状況が必ずある。病氣、死別、歪んだ性欲、などがそれに当たるだろうか。そして苛めという密かな快樂もまたその範疇に入れねばならないだろう。私たちは、生きている限り、誰かによって、どこ



かで、様々な表現で苛められるのである。

行政は、その機能上そうしたものの存在を撲滅できることを目指して行動するほかはない。しかし現実には何という甘い判断なのかと私は驚くのである。

だから、マラリアに対してはめいめいが持つ免疫によって発症しないように用心するのと同様に、苛めに対しても、自ら対抗する精神の強さを持つ以外にほんとうの解決策はないだろうと思う。(二〇一三・二・五)

転載不可